ひまわりからのメッセージ

4号

2011.7.12

西濃圏域
発達支援センター
ひまわり

発行人：中野たみ子

感じとる力を無くさずに……

珍しく二週つづけて土曜日を自宅で過ごしました。そして「旅の千カラ」という番組を見ました。（再放送）

一週目はピアニストの舘野泉さん、次の週はバレエダンサーの首藤康えさん。

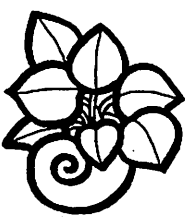
舘野さんは、以前、音楽の指導をしたセブ島を十二年ぶりに訪れ、立派に成長した青年たちと再会を果たします。脳梗塞で右手の自由を失ったピアニストの舘野さんは、倒れて二年後に、左手の演奏曲に出会い、「両手でも、指三本でも演奏するということに変わりはないのだ。」と、以後は「左手のピアニスト」として活動されています。

十二年ぶりに訪れたセブ島のピアノは塩風のために弦はさびついていましたが、その音は、とても深く、あたたかく舘野さんが「気持ちをこめて弾けば応えてくれます。」とおっしゃったことばが心に残りました。

首藤さんはヨーロッパで活躍するバレエダンサーですが、西洋バレエとは全く異なるバリの舞踊を学ぼうと、バリ島を訪れます。目の動き、手足や体の動きなど全く今までとは異なる踊りを現地の舞踊家に習うのですが、「かたち」から入っても、どうもうまくいきません。そんな時、師匠は首藤さんに隣村の祭りを見に行くように勧めます。ガムランの音楽に合わせて踊る村人の舞は自然に感謝し、神々に感謝する自然と一体となった舞でした。それを見つめる首藤さんの表情の中に変化が見られ、「何か」をつかみ取られたことを感じさせられ、私まで感動したのでした。

子どもたちとはじめて出会った時、その表情や行動の中から伝わってくるものがある。決して目に見えないのであるが心の琴線に触れる何かがある。ことばでは上手く表現できないが、感じ取る力を無くしたくないな……と、いつも思うのです。

訪問支援の中で見えてきたもの



「中学校の不登校の生徒の半分は、発達障がいと考えられます」という講演を聞いて、例え、発達障がいであろうとなかろうと、その子たちの困り感は、中学生になって起こってきたものではないだろうに……と思いました。そして、幼児期から、本当は本人が一番困っていたはずなのにその支援がうまく引き継いでもらえなかったり、あるいは困っていることすら知ってもらえずに過ぎてきてしまったことのこわさを思いました。

今年の四月、大垣市では、社会福祉課の中に「発達支援担当」がスタートしました。そこには、教員、保育士、専門員、事務職が置かれ、幼児期から生涯にわたって途切れのない支援をしていく方向で、保育園、幼稚園、幼保園への訪問支援や学校訪問などが始められました。

海津市では発達支援室がおかれ、保健師と保育士の資格をもつお二人がコーディネーターとして保育士の勉強会や、ケース検討会、園訪問など積極的に活動しておられます。

安八町、神戸町、大野町など、教育と福祉、保健の連携を進めておられるし、輪之内町では何年も前からサポートブックの活用が始められています。

こういう流れの背景には、社会に適応することができずに、閉じこもりやニートになっている人の多さもあると思います。そして、保育や教育や療育にたずさわっている私たちに「もっと真剣に子どもたちを見ていこうよ」「幼児期から必要な支援をして、それを引きついでいくことを考えていこうよ」と訴えている子どもたちがいるのだという現実があるのです。

アスペルガー症候群の子どもたちと長くかかわって来られた「アスペ・エルデの会」の石川道子先生（小児科医）は、「自由保育の中で子どもたちは困っているのです」とずっと言いつづけておられますが、県内では「いつ始まっていつ終わるのかがはっきりしない保育、療育」や「一日のスケジュールが示されない」など、子どもの困り感を分か

ろうとせずに過ごしている園も少なからずあるように思います。

しかし、大垣市の訪問支援を始めてみて、保育者さんたちは、やっぱり保育のプロだなあと思います。子どもたちへの注目のさせ方、指示の出し方、製作時の視覚支援など、細かな所まで考えている保育者の方、活動のはじめと終わり、具体的な集合場所など、自分のことばに気をつけていらっしゃる保育者の方も多いと思いました。環境という点では、室内に刺激になる物がいっぱいあって、そのことをアドバイスしても、まだまだ十分な理解が得られていないことを痛感していますが（これは療育施設でも同じです）今後変わっていくことでしょう。

こうした園での取り組みや支援が小学校へ引きつがれていけば、一人ひとりの子どもの理解はもっと広がっていくのではないでしょうか。

「好きなことをさせておけば手がかからない。」「パニックをおこさせないように……やりたい事をさせる。」「興味のあることはできる子です！」「かしこい子なので問題ありません。ちょっとわがままなだけです。」

こんなことばを何度、いえ何十回聞いたでしょうか。その子たちは、今、どうなっているのでしょう？義務教育の間はまだ良いのです。学校の先生たちが考えてくれます。でも、その後は……？？

幼いほど子どもたちはかわいいです。何でも子どもの言う通りにさせてやりたいと思われるでしょう。でも、すぐに子どもは大きくなります。「大きくなれば分かる」とお思いかもしれませんが、大きくなれば、お母さんの力は、もうお子さんに負けてしまいます。今まで思い通りに通してきた子は、力でお母さんに対抗してくることもあるでしょう。

家庭も園も学校も、そして成人した後の支援の場も、手を取り合って支えていかなければ……と、私は多分あせっているのだと思います。行政のしくみの中に、ライフステージを通して支援していくシステムが広がっていくといいなあと思います。

一人ひとり、今、何をしていけばいいのか、一歩ずつ進んでいきましょう。一緒に考えながら……

日々の生活を見直してみませんか？

私の教え子の青年が時々電話をかけてきます。「昨日はゲームをずっとやっていて疲れました。どうしたらいいでしょう？」「どの位の時間、やっていたの？」「夕食たべてからずっとです。」「ずっとって朝まで？」「はい。」

これをどう思われますか？

皆さんのお子さんはいかがですか？　いえ、お父さんやお母さんはいかがですか？　生活のリズムは乱れていませんか？　夜遅くまで子どもを連れまわしていませんか？　パソコンやゲームで夜ふかしをして、子どもたちまで大人中心の生活にまきこんでいるということはないでしょうか？　朝は、子どもたちにごはんを食べさせていますか？　睡眠は十分にとっていますか？

こんなことを聞くのは失礼なことだとわかっているのですが、最近の新聞には、「睡眠と障がい」を結びつける記述や、子どもの生活リズムの乱れを指摘するものもあって、あえて書いてみたのです。

大震災があり、原発事故があって、私たちの生活を見習そうという空気が生まれましたけれども、少しずつ又、以前の便利さに戻ろうとしている気がします。大人も子どもも便利さに慣れ、楽な方へ楽な方へと流れていくのだろうと思います。そして、自己コントロールがうまくできず、自己決定もできない人間を多く生み出しているのかもしれません。

指先が上手く使えない子、お箸が使えない、鉛筆が持てない、はさみが上手く使えない、ボタンがかけられない、立って靴がはけない、左右がわかっていない、手首が回せないなど生活面での困難さをもつ子どもたちも多いなあと最近感じます。

生活の中で、今まで子どもたちが知らず知らず身につけてきた生きる力は、現在では意識して学ばせてあげないと身につかないのではないかと思います。子どもたちがよく言うことばに「まだ習っていません」。「そんなむつかしいことは教えてもらっていません」。ということがあります。

(教えてもらっていなくても自分で考えたらいいのじゃない？、自分で決めたらいいのじゃない？)と思うのですが、子どもたちには通用しません。

かって、知的障がいの子どもたちの手を取り、どのように手指を動かせばいいのか、どんなふうに体の姿勢を保てばいいのかを体験の中で学ばせてきましたが、同様のことが発達にアンバランスさをもつ子どもたちにも言えると思います。

ちなみに前述の青年には、ゲーム時間は三時間までと教えました。たまにやりすぎることもあるようですが、大むね私の提案をのんでくれました。しかし、生活の様々な場面で自己決定ができず、困っていることもまだまだあります。生活の中で学び、考えていけるように、私達はもっと工夫していく必要があると思います。生活のさまざまな場面が子どもたちの学びの場であることを常に頭のすみにとどめておきましょう。ゲームやパソコンやメールが相手では、生きていく力にはなっていきませんね!!

六月親の会例会報告

医療の説明と検査の見方について

六月のセンター親の会では、医療機関からいただく書類について、どの様な観点で見ていけばいいかということを学びました。専門的なことばも多く、理解するのがむつかしいというお母さん方の要望もあり、いかわクリニックの井川先生に書類をいただいてきて、一緒に考えました。

知能検査については、ビネー検査とウェクスラー検査について、ビネー検査は日本版として、田中ビネー、鈴木ビネー、辰見ビネーなどがあり、ウェクスラー検査は年令によって ウィプシー(幼児) ウィスク(五～十六歳) ワイス(成人)に分かれていること、それぞれの検査の特性などを学びました。

ビネー検査は、六歳の児が六歳の発達であればIQ(知能指数)が一〇〇となり、六歳の児が四歳六ヶ月の発達であればIQ七五となります。

ウェクスラー検査の方は、言語性IQと動作性I

Qに分かれていて、さらに群指数といって四つの項目に分かれて（言語理解、知覚統合、注意記憶、処理速度）表示され、グラフとしても表されるので、検査を受けた児の特性を分析できるようになっています。言語性検査は主に聴覚情報処理に関係し、耳で聞いてことばで答える問題ですし、動作性検査は、主に視覚情報処理に関するもので目で見て模様を作ったり、パズルのように絵を組合わせたりする問題です。

耳で聞いてことばで答えるのは苦手だけれど、目で見て課題をこなしていくことが得意な児であれば、園や学校で視覚的な支援をしてもらうことで助かるでしょうし、逆に視知覚の困難さが浮かび上がってくる場合もあります。

検査は一つの目安にしかすぎませんが、一人ひとりの児について、得意な所と苦手な所が少しわかって、そのための手だてについても考えていくことができるということは、良いと思います。

知能検査とは別に発達検査というものもあり、K式（京都児童院）発達検査といわれるものも広く使われています。DQ（発達指数）で表わされますが、この検査も個人内差を見ることができるので、子どもとのかかわり方について示唆をよみとることができます。

検査は数値だけで終わってしまっては何にもなりません。結果から分析し、子どもの教育や日常のかかわり方の手がかり、手段に利用してこそ生きてくるものでしょう。

お知らせ

◎八月九日（火）

親子の会にしたいと思います。（小学生以上）

午前十時～十二時　学園ホールにて

はじめての試みです。社会福祉課発達支援担当の方々にお手伝いいただきます。

申込みは中野まで　（七月末日〆切）